

『日蓮大聖人御伝記』(延宝九年・一六八一年刊行)の考察

小林 正 博

『日蓮大聖人御伝記』は、大部の日蓮伝として江戸期に四度も版を重ね、日蓮門下の間に広く読まれていたベストセラーである。なんといっても注目すべきはその量の膨大さにある。日蓮の生涯をこれほど詳細に記した日蓮伝は後にも先にもない。江戸期に刊行された後発の日蓮伝に与えた影響は予想以上に大きいものがある。しかし、本書の内容を公開したのは、わずかに巻九の第三一科「大聖人和讃の事」が冠賢一氏⁽¹⁾によってなされているくらいで、十分な考察もなされておらず、いわば謎の大日蓮伝として放置されたままといつてよい。

本書は一六八一年、日蓮四百年遠忌を期して木版刷りとして刊行されたが、著者については特定することはできない。それでも最後の巻十一に日朗の弟子・日像の生涯を補足している⁽²⁾ので、日蓮宗日像門流に連なる人であることが窺える。すでに本書成立以前に『録内御書』と『録外御書』が刊行されており、本書の筆者も遺文の引用はこれらに依っている。

ただ、一般信徒から婦女子をも対象とする意図から、多数の挿絵を収め、文章を平易に変え、振仮名を付けるなどの配慮がなされている。

当時本書に先行する日蓮伝の刊行には次の三種があつた。

書名	成立	著者	初版刊本の出版年
『元祖化導記』	一四七八年	身延十一世日朝	一六六六年
『日蓮聖人註画讃』	一五〇一年ごろ	妙法寺日澄	一六〇一年
『元祖蓮公薩埵略伝』	一五六六年	本隆寺日修	一六〇一年

この他、慶安三年(一六五〇年)に刊行された日蓮の『諫迷論』全十巻の中に、簡略な日蓮伝が記されている。これは『日蓮聖人註画讃』をベースに肉付けしたもののなので内容的な目新しさはない。

本書ではこれらの先行する伝記を入手し執筆の上で参考にはしたであろうが、文章をそのまま引用するような形跡はない。むしろ『日蓮大聖人御伝記』にはそれまでにない記述をふんだんに盛り込み、文献学的にも重要な日蓮伝として位置づ

『日蓮大聖人御伝記』（延宝九年・一六八一年刊行）の考察（小林）

けることができる。

「一」本書の概要、構成

【刊行年代と奥付】

①延宝九年本（一六八一年）「延宝九辛酉年季春下浣 寺町二条下町 中村五兵衛開版」

②寛政七年本（一七九五年）「書林 京堀川六角下ル町 中川藤四郎版」

③文化十三年本（一八一六年）「京都書林 村上勘兵衛 浪華書林 加賀屋善蔵」

④天保十四年本（一八四三年）「浪華書林 心齋橋通安土町吉田松根堂 加賀屋善蔵 梓」

最初の三本は同じ版本を用いており、本文の内容はすべて同じである。最後の天保本だけは、序の部分は新たに版本をおこし、その他は部分的な加筆訂正がなされている。しかし天保本の最大の特徴は、語注や解説を各頁の上段に「首書補註」として表記したと挿絵に標題を附したことである。

【本書の構成】

本論として日蓮伝九卷、身延山久遠寺の詳細な地図と解説を施した巻十、補巻として日像伝が一卷、計十一巻となる。

丁数、挿絵の数は次のようになる。

計 一八四科 三〇四丁 うち挿絵 一丁分（見開き二頁）四三、半丁分 四五

頁換算すると六〇八頁、うち挿絵は一三一頁にも及んでおり、先行する類書『日蓮聖人註画讃』をはるかに凌ぐ量を誇っている。

「二」本書の内容

【日蓮伝承の宝庫】

本書が日蓮の生涯を記すのに一八四科もの長編になっているのは、公になっていない伝承を多く紹介しているからで、次表に刊行のレベルで初見の伝承の内容を列記し、これらの伝承を取り入れた後発の日蓮伝を整理し、下段に示した。

本書 巻科	内容	後に引用した伝記名
卷一第十三科	比叡山華芳谷の石塔	「統紀」「真実」
卷一第二四科	富木常忍入信の経緯	「統紀」「紀年」「末法」「真実」
卷二第四科	京佐女牛八幡の話	「霊記」「年譜」「紀年」
卷二第五科	伊勢間の山常明寺の石塔	「高祖」「統紀」「年譜」「紀年」「末法」
卷二第六科	尾張熱田社の法華堂	「年譜」
卷四第十五科	子やすのまんだら	「高祖」「霊記」「真実」
卷四第十七科	覚田の石題目	「高祖」「霊記」「統紀」「年譜」「紀年」「真実」
卷四第十九科	遠藤治部左衛門の受法	「霊記」
卷四第二十科	松崎の石題目	「高祖」「霊記」「年譜」「紀年」「真実」
卷四第二十科	松崎の春日大明神の御盃	「霊記」「真実」
卷五第十八科	厳島神社の明神、曼陀羅を請う	「高祖」「統紀」「年譜」「紀年」「真実」

卷六第	三科	高田毘沙門天出迎えの話	「高祖」
卷八第	三科	村岡民部大輔と妻妙円の話	「紀年」
卷八第	五科	身延七面明神と花瓶の傳承	「高祖」「紀年」
卷八第	五科	身延での日蓮自筆画	「高祖」「年譜」
卷九第	六科	はぶきのこしかけ石と石塔	
卷九第	七科	甲斐石和川の石經	「高祖」

略号	書名	刊行年	著者	出典
「靈記」	法華靈場記冠部	一六八五年	豊臣義俊	日蓮聖人伝記集 二二二頁
「高祖」	本化別頭高祖伝	一七二〇年	身延三世日省	日蓮聖人伝記集 二四七頁
「統紀」	本化別頭仏祖統紀	一七三一年	身延三六世日潮	日蓮宗全書所収
「年譜」	本化高祖年譜並に攷異	一七七九年	建立・玄得	日蓮聖人伝記集 三一〇頁
「紀年」	本化高祖紀年録	一七九五年	深見要言	日蓮聖人伝記全集十卷
「真実」	日蓮大士真実伝	一八六七年	小川泰堂	明文館

これらは、祖師崇拜の篤い思いから生じた祖師神話ともいうべき類であるが、単純に荒唐無稽な作り話とみなして葬り去るべきではない。本書の著者は日蓮ゆかりの地を歩き現地に実際に立って見聞してきた情報をもとに書いたことが窺える。そういう意味では十七世紀後半における日蓮傳承の民俗

『日蓮大聖人御伝記』（延宝九年・一六八一年刊行）の考察（小林）

学的研究資料として一定の価値を認めることができよう。

なお主要な日蓮伝を収めた『日蓮聖人伝記集』（一九一〇年・日蓮宗全書出版会）の「例言」の中で本書について以下のような記述がある。（同五一三頁）「日蓮聖人御伝記（十巻伝又は国字伝といふ）亦優婆塞某の手に成るあり、画を交へたる読本牀にして後世紀年録真実伝等の倣を為すもの」と。つまり、後に著された深見要言の「本化高祖紀年録」や小川泰堂の「日蓮大士真実伝」等へよからぬ影響を与えてしまったというのである。

【多くの初見資料】

文献学的な観点からは、多くの日蓮関係文書を初めて公開した点において、本書の持つ意義は大きい。

① 父の名を三国太夫、母の名を梅菊とする「産湯相承事」の説を採用（巻一、第一科）

② 出家年齢、十六歳説を立てる（巻一、第三科）

③ 「不動愛染感見記」（保田妙本寺現存）の公開（巻一、第二三科）⁽²⁾

④ 「伯耆公御房御消息」（富士大石寺現存）の公開（巻二、第十二科）

⑤ 和泉式部と能因法師の和歌を引用（巻三、第六科）

⑥ 熱原の法難についての詳しい記述（巻八、第十三から十八科）

⑦ 弘安二年の本門の戒壇板本尊に具体的に言及（巻八、第

『日蓮大聖人御伝記』（延宝九年・一六八一年刊行）の考察（小林）

十五科）

⑧「御遺物配分事」（日興正本・池上本門寺現存）の公開（巻九、第十八科）

⑨「大聖人和讃」を掲載（巻九、第二科）

九点挙げてみたが、この中で白抜き数字の内容は、日興門流特に大石寺色の強いものであることが浮かび上がってくる。

ここでは一例として⑦の「弘安二年の本門の戒壇板本尊」の記述を挙げておく。⁽³⁾

第十五 本門の戒壇板本尊の事（かなルビは省略した）

板本尊といへるは富士の大石寺の什物なり。たけ六尺ばかり、広さ式尺七八寸、あつさ一寸七八ぶの板なり。木は何ともしられず、黒ぬりにしてほりたり。文字の内には金ばくを入られたり。御曼陀羅の下に二字づゝならべて横に本門戒壇施主弥四郎国重と、是も聖人御自筆にてあそぼせり。此板または黒ぬりなど、かの弥四郎寄進し奉るにや。いぶかし。伝にはく、末代にいたりて本門かいだんの勅定を申うけ富士山に戒壇堂をきづくへし。その用意としてかねてあそぼしをかれし也。御弟子日法細工の上手なれば、是をほらさしめ給へり。また日興への御消息にはく、国主被万立夢此法務者、富士山本門戒壇可万被夢建立務也、可万待万時而已、事戒法謂是也云云。

〔三〕 本書の底本

実は、本書とほぼ同時代の十七世紀後半、大石寺には詳細な「日蓮伝」が著されているのである。大石寺十七世・日精

（一六〇〇～一六八三年）の『日蓮聖人年譜』（『富士宗学要集』第五巻所収）がそれである。もしかしたら本書は『日蓮聖人年譜』から多くの情報を得て、これを下敷きに書いたのではないかという考えに及んだ。『日蓮聖人年譜』に当たってみたところ、まさにその予想は的中していた。例えば『日蓮大聖人御伝記』巻一第二十五科と巻三第七科「行敏御返事」の文章と『日蓮聖人年譜』のそれとを対照させると明らかにどちらかが底本になっていることが判明する（字数の都合上対照結果は省略する）。

『日蓮聖人年譜』の成立年代については詳細な議論は省くが、一六七一年以降一六七六年以前の成立であり、未刊ではあったが本書に先行する日蓮伝である。これにより、本書の筆者は何らかのルートにより、『日蓮聖人年譜』を入手し、かなり多くの部分に反映させていったのである。

【結語】

最後に、以上述べてきたことを箇条書きにして、『日蓮大聖人御伝記』の特徴を整理し、結語に代える。

一、日精の『日蓮聖人年譜』から引用した表記がめだつ。

一、弘安二年の戒壇本尊をはじめとする貴重な情報を初めて刊行の形で公開した。

一、著者は日興門流ではなく、日朗―日像門流の側に立っている。

一、編集の意図として、大量の挿絵と和文体、かなルビを附し多くの読者層への普及をめざしている。

二、日蓮ゆかりの地に伝わっていた風聞、作り話の類を多く収め、潤色された日蓮像形成の嚆矢的役割を担い、のちの諸日蓮伝にも大きな影響を与えた。

1 冠賢『近世日蓮宗出版史研究』平楽寺書店・一九八三年
一九五頁

2 高森大乘『日蓮遺文『不動愛染感見記』小考』（印度学仏教学研究五〇一―号 九八頁）によれば、木版画として貞享四年（一六八七年）に版行されている。これは本書刊行六年後である。

3 大石寺の戒壇本尊の大きさの表記は本書を嚆矢とし、以下、宝暦七年（一七五七）日因の記録「有師物語聴聞抄佳跡 上」では「長四尺七寸五分、横式尺壹寸七分、厚式寸貳分」（富士宗学要集 一卷二五一頁）とあり、文政六年（一八二三）の日量の記録「富士大石寺明細誌」では「厚サ二寸二分、竪四尺七寸五分、横二尺一寸五分」（富士宗学要集 五卷三三四頁）とある。また熊田葦城著『日蓮聖人』（三七五頁・一九一一年初版発行）によれば、「丈四尺六寸余 幅二尺一寸余の楠材」とある。これら三つの寸法表記はほぼ同じと見て良いが、本書での寸法とは多少相違している。

〈キーワード〉 日蓮伝、日蓮、江戸期刊本、大石寺日精

（東洋哲学研究所主任研究員）

『日蓮大聖人御伝記』（延宝九年・一六八一年刊行）の考察（小林）

新刊紹介

末木 文美士

『仏典をよむ
―死からはじまる仏教史―』

B 六版・三三〇頁・本体価格一、八〇〇円
新潮社・二〇〇九年四月